

八月の田んぼと農家の暮らし。 静かにハレの日を迎えています。

八月の田んぼは、稲の花どき、花ざかりです。

花といつても花びらはありません。花が開くと、田んぼに白い綿がまとわりついているように見えるのですが、都会の人は、それが花だとは気づかないかもしれませんね。

華やかではないけれど、私たちにとっては、心待ちにしていた景色。春の種蒔きから始まった米づくりが、ここま

です。

五月の田植え後、茎の数を増やし、葉を伸ばしてきた稲は、夏になると生殖成長を始めます。茎の中に穂の赤ちゃん（幼穂）が生まれ、それが、株元近くからだんだんに上へ押し上げられて、八月上旬には、ボンという勢いで姿を現す。これが出穂です。

この出穂が終わると同時に、穂の上部から花が開き始めます。つまり、緑色のえい（やがて朶になる部分）が、プクッと膨らんで二つに割れ



も、受粉がうまくいきません。そんな時は、私たちだけでなく、稲自身も切ないことでしょう。暑くてカラッと晴れた夏らしい天気は、好きなのは、稲も私たちも同じです。

ことを、「偉いな」「ありがたい」と思うのは、私だけではないでしょう。ただし、気温が低すぎたり、逆に四十度近かったり、天気が悪いと、せっかく開花して

さて、穂の上部からだんだんに開花していき、すべてが咲き終わるには五日程度かかります。品種によって開花時期がずれているので、私の田

て、中から小さな雄しべが六本、するすると伸びてくる。

えいが開くのは、天気の良い日の九時頃と決まってお

稲の花とハレの日

一穂から百粒近い米が収穫できるのは、この自家受粉の高い能力のお陰。そんな稲の

んぼでは、二週間ほど開花を見るができます。その二週間は特別な日々、ハレの時期ではないでしょうか。

祭りとお盆

私が出穂の頃は、稲の花どきは、夏祭りの時期と重なり、まさにハレの日が続いたものです。

五穀豊穡と無病息災を祈る夏祭りは、集落ごとに日程をずらして行われたので、大人も子どもも祭りの「はしご」を楽しみました。子どものお目当ては、神社の境内に出ている駄菓子店。大人はほろ酔いで輪になり、吉川民謡「十三夜」や佐渡おけさなどを踊っていました。片道二時間の道



吉川水源の流れ

名水の流れ

ブナの森から湧き出して、里へと下る名水は、杜氏にとっては仕込みの水。美酒づくりには欠かせない。稲にとっては命の源。名水がうまい米を育てる。

よしかわ便り たなだ



今月の健菜米づくり

今年には空梅雨気味でしたが、七月二二日からは一変。吉川の堤防が「あわや、決壊か！」というほどの大雨が続きました。近隣では土砂崩れなどの被害も出ましたが、幸い、健菜米の田んぼは無事。大過なく凌げて、ホッとしました。

とはいえ、最近の天候は予想がつかず、従来の農業カレンダーが役に立ちません。異常気象に対応できる応用力が必要ですね。

さて、今はカメムシのすみかとなる畔や周辺の草刈りに精を出しています。カメムシは出穂後の水田に侵入して、籾に針を刺して中身を吸収してしまふ、米の大敵。農薬を使わずに防除するため、みなで汗を流しています。

を歩いて、他の集落に出かけたのですから、それだけ楽しかったのでしょう。残念ながら、昔のような夏祭りは姿を消してしまいました。それでも、多くの集落では今も、神社に氏子が集まって五穀豊穡を祈願しています。賑やかではないけれど、心のこもった祭りです。

が、それぞれの家族を連れて帰ってくるので、母と妻は、腕によりをかけてご馳走を用意するなど、はりきっています。お盆の間は、毎日、お墓参りに行くのが集落の習わしですが、そこでは懐かしい顔と再会することもしばしば。「久しぶりだね」「どうしているの」という会話が飛び交っています。けれど、賑やかになるのは、わずかな間だけ。お盆が終わると、また、都会へと戻っていく人びとを、可憐な稲の花が静かに送り出しています。

【話／山本秀二】

